

組織痕土器研究の現状

東 和 幸

1 はじめに

九州地方の縄文時代終末から弥生時代初頭にかけてよく見られる遺物に、組織痕土器がある。土器製作における通常の巻き上げ技法とは異なり、型取り法による成形のために型から粘土を外し易くする布状の組織が圧痕として観察できる。圧痕には、①編布、②網目、③平織、④籠目、⑤木葉があり、いずれも遺跡では残りにくい当時の道具類を二次的ではあるが我々の目前に甦らせてくれる。これらの組織痕そのものを追究することの他に、その用途やなぜこの時期だけに存在するのか、あるいは器形の変遷など、研究課題は多くある。本稿では組織痕土器の分布を調べると共に、その研究の現状を確認したい。

2 研究史

組織痕土器に最初に注目したのは鏡山猛氏である。1961年から1962年まで3回にわたって発表した「原生期の織布 —九州の組織痕土器を中心に—」には、現在の組織痕土器に対する到達点のほとんどが網羅され指摘されている（鏡山 1961a・1961b・1962）。以下箇条書きすると、①組織痕には、蓆目・網目・平織・籠目がある。②型づくりによる成形方法であり、組織痕が型から土器を外し易くするものである。③口縁部に至るまでは巻き上げ法も併せて行われる。④組織痕の上から粘土をぬり付けて、組織痕が消えている例もある。⑤外面に煤が付着するとともに火を受けて赤色化していることから、炊さん具として用いられた。⑥布や織物の研究にとって重要である。⑦縄文時代晩期から弥生時代のはじめにかけての黒川式土器、山ノ寺式土器、原山式土器に伴って使われたものである。⑧東九州を除く九州島に分布する。⑨組織痕は編布が最も多く、特に鹿児島県に多い。⑩網目の粗いものは網を重ねている。⑪組織痕は文様として付けられたのではなく、土器製作上必然的に付いたものである。⑫組織痕土器は日常容器として大量に作られている。⑬外面は粗織のまま、内面は平らに磨かれている。⑭丸底あるいは平底の浅鉢形をした器形である。⑮組織痕の研究にはモデリングが有効である。⑯組織痕の記述には、編布はタテ糸間隔とヨコ糸1cm辺りの本数、網目は結び目間の長さを測り出す。などである。また、現在見解が分かれる指摘としては、仮説としながら南島方面からの伝播ルートが考えられるとしたことと、宮崎県下弓田遺跡出土例などの布痕が古代の焼塩壺であることがわかったことなどがある。いずれにしても、本格的な発掘調査が実施されることが少なかった時代であったものの、組織痕土器についての研究をここまで掘り下げていたことに敬服したい。鏡山猛氏と同じ時期に組織痕土器に注目したのが大脇直泰氏であり、九州の黒川式土器と山ノ寺式土器に押圧手法すなわち組織痕土器が存在することを指摘した（大脇 1961）。

次に、組織痕土器について主体的に取り上げるのは渡辺誠氏である（渡辺 1982・1986・1991）。

1991年時点で、九州で組織痕土器が出土した93遺跡を挙げている。渡辺氏はそれぞれの圧痕に注目して研究し、蓆目と呼ばれていた編み方が、新潟県十日町市に伝わる越後アンギンと同じ手法であるという伊東信雄氏の意見を取り入れ、編布（アンギン）圧痕としている。そして、東北日本では縄文時代前期に編布の底部圧痕がみられることから、九州における組織痕土器の編布はその延長上にあるとした。また、韓国の東三洞貝塚から出土した網目圧痕土器を提示し、西北九州型結合釣針や石鋸の分布状況と重なることで、組織痕土器の起源地を示唆している。さらに、組織痕土器の用途にも触れ、魚汁あるいは煮干しなどを作ったのではないかと述べている。

編布については尾関清子氏が実験考古学的手法で実際に布地や衣服を再現し、それまで原始的な衣類を纏っていたと考えられていた縄文人が、しなやかで着心地の良い服を身につけていたことを明らかにした（尾関 1996）。また、編布の編み方にも基本的なものと、ヨコ糸を1本ずつ交互に飛び越しながら編みあげる応用編布があることを突き止めている。さらに、タテ糸の間隔を変えることによってデザインも考慮されていたことを指摘している。1998年に筆者は、鹿児島県内における組織痕土器の地名表を作成し、86ヶ所の遺跡を提示した（東 1998）。また、それまでなかった型作りによる技法を取り入れてまでも必要とした器形の組織痕土器は、栽培されはじめた当初の穀類を一度炒ることによって食べられるようにするための道具ではないかと述べた。

3 組織痕土器地名表

表1～表5は九州における組織痕土器の地名表である。鹿児島県146遺跡、宮崎県38遺跡、熊本県50遺跡、福岡県8遺跡、佐賀県16遺跡、長崎県35遺跡の合計293遺跡を確認することができた。1961年の鏡山氏の時点で50遺跡、1991年の渡辺氏の時点で93遺跡であったことを考えれば、加速度的に遺跡数を増していることが窺える。表の項目は下記のとおりであり、最低限の情報を提示してある。

所在地については、合併後の新しくなった市町村名で記入されていない所もある。時期区分については、組織痕土器が主体的に出土する前後を含めた縄文時代晩期初頭から弥生時代前期までを対象とした。入佐式土器新段階（堂込 1997）は南九州での土器型式であるが、中九州では古閑2式土器（清田 1998）、北部九州では堀田Ⅰ式土器と貫川Ⅱ式土器（水ノ江 1997）に相当する段階である。滋賀里Ⅱ式土器との並行関係から、全国的な広域編年でも縄文時代晩期初頭に位置づけられる。黒川式土器は九州地方で齊一的な形をした胴張り浅鉢が知られており、その同時性を窺うことができる。黒川式土器については細分案もあるが、ここでは一括して提示してある。次の無刻目突帯文土器の段階は、堂込秀人氏の設定する黒川式土器新段階（堂込 1997）を含みながらも、黒川式土器と刻目突帯文土器の間に位置づけられる土器である。宮崎県では松添式土器、鹿児島県では干河原段階、熊本県では清田純一氏の述べる無刻目突帯文土器1期と無刻目突帯文土器2期（清田 1998）が、北部九州地域では堀田Ⅱ式土器と貫・井手ヶ本式土器（水ノ江 1997）が該当する。刻目突帯文土器は佐賀県唐津市菜畑遺跡の12層から9層出土品や福岡市板付遺跡出土の夜白Ⅰ式土器などを指標とするものであり、弥生時代早期に位置づけられる。弥生時代前期としたものは、板付Ⅰ式土器が基準となるものであり、如意状口縁の甕形土器や頸部と胴部の境に段を有する壺形土器

表1 組織痕土器地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	時期				種類(点数)	文献	
			人佐新	黒川	無刻日帯	刻日突帯			弥生前期
鹿兒島県									
鹿兒島地区									
1	鹿大構内	鹿兒島市郡元		○	○	○	編布(1)	鹿大1998	
2	不動寺	鹿兒島市上福元町				○	編布(1)	市(25)	
3	人龍B地点	鹿兒島市大竜町				◎	編布(2)	市(34)	
4	原田久保	鹿兒島市宇宿		○	○	○	編布(1)	市(35)	
5	魚見ヶ原	鹿兒島市魚見町				○	◎	編布(7)・平織(4)	七(111)
6	小山	鹿兒島市吉田町佐多浦		○				編布(3)	県(20)
7	永野	鹿兒島市喜入町瀬々串			○	○		編布(6)	町(4)
8	帖地	鹿兒島市喜入町帖地		○	○	○		編布(5)・網目(2)	町(5)
9	フミカキ	鹿兒島市福山町			○	○		平織(1)	七(74)
10	前原	鹿兒島市福山町			◎	○		編布(4)・網目(1)	七(107)
11	伊堀	鹿兒島市石谷町			◎	○		編布(8) 編布(3)	七(30) 七(101)
12	仁田尾	鹿兒島市石谷町			◎	○		編布(11)・網目(4)・不明(6)・ 木葉(1)	七(128)
指宿地区									
13	西原迫	指宿市新西方西原迫				◎	○	編布(13)	市(4)
14	新番所後Ⅱ	指宿市十二町			◎		○	編布(14)・網目(1)	県(62)
15	大渡	指宿市十二町		○		○		編布(4)	鏡山論文
川辺地区									
16	永野	南九州市知覧町水里	○			○		平織?(2)	町(1)
17	南田代	南九州市川辺町田部田		◎	◎	○		編布(2)・平織(2)	七(88)
18	堂園A	南九州市川辺町神殿			○				七(108)
19	益山	南さつま市加世田万世							鏡山論文
20	干河原	南さつま市加世田津貫			◎			編布(3)	市(12)
21	木落	南さつま市金峰町白川			○	◎		編布(2)	町(2)
22	上焼田	南さつま市金峰町宮崎		○		○		編布(4)	原(5)
23	下堀	南さつま市金峰町宮崎	○	○	○	○		編布(1)	町(20)
24	上水流	南さつま市金峰町花瀬	○	◎	◎	○		編布(16)・籠目(6)	七(113)
25	馬塚松	南さつま市金峰町	◎	○				籠目(10)	七(97)
26	尾ヶ原	南さつま市金峰町	◎	○	◎			編布(1)・不明(1)	七(98)
日置地区									
27	黒川洞穴	日置市吹上町		◎				編布(1)	鏡山論文
28	大園A	日置市吹上町入来						編布(1)	町(16)
29	瀬戸口	日置市日吉町吉利						不明	町(1)
30	西玉ヶ原	日置市東市来町永山				○			
31	市ノ原5地点	日置市東市来町湯田			○	◎		編布(5)・平織(6)・不明(8)	七(105)
32	市ノ原4地点	日置市東市来町湯田			○	◎	◎	編布(2)・平織(10)	七(130)
33	上二月田	日置市東市来町養母			○	◎		編布(1)	町(1)
34	前畑	日置市東市来町伊作田			◎			不明	町(6)
35	老ノ原	日置市東市来町伊作田						不明	町(8)
36	山ノ脇	日置市伊集院町郡			◎			編布(20)・網代(8)・もじり編み(1)	七(58)
37	上ノ平	日置市伊集院町下神殿			○			編布をナデ消す	七(70)
38	上ノ原	いちき串木野市島内			○	◎		編布(2)	七(62)
北薩地区									
39	成岡	薩摩川内市中福良		◎		○		編布(6)	県(28)
40	計志加里	薩摩川内市			○			編布・網目	七(38)
41	霜月田	薩摩川内市			○			ナデ消し	七(131)
42	赤松	薩摩川内市東郷町仲深			◎			不明	町(1)
43	坂ノ下	薩摩川内市東郷町南瀬			◎	○		編布(1)・不明(3)	町(6)
44	中町馬場	薩摩川内市里村里			○	○	○	網目(1) 網目(1)	村(1) 村(2)
45	一ツ木	さつま町一ツ木			◎			編布・網目	宮之城町(9)
46	石下橋	さつま町中津川			○			編布(1)	薩摩町(1)
47	北方	さつま町中津川		○	○			不明(5)	薩摩町(4)
出水地区									
48	下終迫	出水市高尾野町		◎	◎	○		編布(60)・網目(58)・平織(1)・ 網代(24) 編布(2)・網目(2)	町(4) 町(5)
49	市来	出水市武木			○			編布(1)	市(4)
50	大坪	出水市美原町	◎	◎	○	○		編布(36)・網目(26)	七(79)
51	二浦	長島町伊唐			○			編布(1)	東町1998
伊佐地区									
52	原田	大口市原田						網目	鏡山論文
53	諏訪原	伊佐郡菱刈町諏訪原						編布(1)	鹿考古1988
始良地区									
54	竹牟礼	蒲生町漆				◎		平織(1)	七(5)
55	稼原	霧島市牧園町上中津川						網目(1)	県(37)

表2 組織痕土器地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	時期				種類(点数)	文献
			入佐新	黒川	糸刻日突帯	刻目突帯		
56	中福良	霧島市牧園町万藤		○		◎	編布(1)	町(3)
57	妻山元	霧島市国分		○	○	◎	編布(1)	市(1)
58	上野原	霧島市国分上野原縄文の森	○	◎	○	○	編布(38)・網目(5)・網代(1)・木炭(2)・不明(5)	セ(52)
59	前原和田	霧島市福山町嘉例川	○	○			編布(1)	町(6)
60			○	○			編布(3)・網目(2)	セ(36)
61	城ヶ尾	霧島市福山町嘉例川		○			編布(4)・網目(1)	セ(60)
62	供養の元	霧島市福山町嘉例川					網目(1)	町(5)
置於地区								
63	宮原	曾於市財部町北俣日光		○			編布(5)	町(4)
64	西栗須	曾於市財部町		◎			編布	町(5)
65	踊場	曾於市財部町南俣		○	○		編布(1)	セ(71)
66	九養岡	曾於市財部町南俣		○			籠目?	セ(71)
67	上中段	曾於市末吉町深川		○		◎	編布(19)・平織(2)	町(4)
68	四枝道	曾於市末吉町深川		○			網目(1)	町(5)
69	楠木岡	曾於市末吉町深川				◎	平織(3)	町(5)
70	後迫	曾於市末吉町深川				○	編布	松下論文
71	柳井谷	曾於市末吉町深川		○		○	編布(15)	松下論文
72	中崎	曾於市末吉町深川					編布	松下論文
73	新住吉	曾於市末吉町新住吉					編布	松下論文
74	平松原	曾於市末吉町南之郷		○		○	編布(2)	セ(13)
75	橋野	曾於市末吉町南之郷					編布	松下論文
76	井手ノ上	曾於市末吉町南之郷		○			編布(1)	町(8)
77	南之郷	曾於市末吉町南之郷					編布	鏡山論文
78	湯ノ尻	曾於市末吉町					編布	松下論文
79	荒神免	曾於市末吉町					編布	鏡山論文
80	桐木耳取	曾於市末吉町	○			○	編布(15)	セ(81)
81	イチノキ	曾於市大隅町岩川					編布(1)	県(29)
82	上山	曾於市大隅町岩川					編布(2)	県(29)
83	笹段	曾於市大隅町岩川						県(36)
84	竹下谷	曾於市大隅町岩川						県(36)
85	鳴神	曾於市大隅町岩川					編布	町(4)
86	向井ヶ迫	曾於市大隅町月野			○		編布(2) 編布(11)・網目(2)	県(29) 町(18)
87	久保崎Ⅲ	曾於市大隅町月野					編布(1)	町(36)・(39)
88	久保崎Ⅳ	曾於市大隅町月野					編布(1)	町(25)
89	吹切段工	曾於市大隅町中之内						町誌
90	西原段Ⅱ	曾於市大隅町中之内				◎	編布(37)・網目(12)・平織?	町(12)
91	原村Ⅱ	曾於市大隅町		○			編布(1)・不明(1)	セ(124)
92	中之迫	曾於市大隅町					編布	セ(127)
93	鳥居川	曾於市大隅町			○		編布(5)	セ(125)
94	チャシノ木	曾於市大隅町			◎		編布(49)・網目(4)・平織(1)	セ(125)
95	藤野B	志布志市志布志町		○			編布(1)・不明(1)	セ(109)
96	山裾	志布志市志布志町内之倉						県(36)
97	今別府	志布志市志布志町内之倉		○			編布	松下論文
98	片野洞穴	志布志市志布志町内之倉		○	○	○	編布(1)・網目(2)	鏡山論文 河口論文
99	平原A	志布志市志布志町内之倉		○			編布(1)・網目(1)	町(12)
100	倉園C	志布志市志布志町内之倉					編布(1)	町(26)
101	別府(石踊)	志布志市志布志町帖	○	○	○		網目(5) 編布(9)・網目(1)	県(29) 町1979
102	中尾	志布志市志布志町帖					編布(1)	鏡山論文
103	前之段	志布志市志布志町帖						県(36)
104	鎌石	志布志市志布志町帖		○	○		編布(7)	町(16)
105	出口B	志布志市志布志町帖	○				編布(1)	町(12)
106	飛渡	志布志市志布志町帖		◎			網目(5)	町(13)
107	蔵園	志布志市志布志町田之浦		○			編布(2)	町(11)
108	山久保A	志布志市志布志町田之浦		○			網目(3)	鏡山論文 町(11)
109	小迫	志布志市志布志町田之浦		○			編布(1)・網目(1)	町(11)
110	外ノ牧	志布志市志布志町					編布(1)	松下論文
111	道重	志布志市志布志町	○	○	○		編布(1) 編布(8)・網目(2)	鏡山論文 町(17)
112	高牧城跡	志布志市有明町山重					網目(1)	町(11)
113	高牧B	志布志市有明町山重					編布(1)	県(29)
114	仮屋B	志布志市有明町野井倉					編布(1)	県(29)
115	山ノ口	志布志市有明町伊崎田		○			網目(1)	町(1)
116	牧原	志布志市有明町伊崎田			○		編布(3)・網目(8)	町(3)
117	牧原A	志布志市有明町伊崎田			○		編布(6)・網目(3)	町(3)
118	大迫	志布志市有明町伊崎田			○		網目(2)	町(3)

表3 組織痕土器地名表(3)

番号	遺跡名	所在地	時期					種類(点数)	文献
			入佐新	黒川	無刻目突帯	刻目突帯	弥生前期		
119	西ノ脇	曾於郡大崎町野方						編布(1)	県(29)
120	立山B	曾於郡大崎町野方	○		○	○		編布(2)	町(3)
肝臓地区									
121	東田	肝付町高山町野崎				◎		編布(4)	セ(6)
122	柵ノ木	肝付町内之浦町北方							池水戸崎論文
123	山内	鹿屋市吾平町大牟礼			○			編布(1)	町(1)
124	大牟礼	鹿屋市吾平町大牟礼			◎			編布(9)・網目(7)・平織(2)	町(1)
125	西方高迫	鹿屋市吾平町上名				○		編布(1)	町(3)
126	筒ヶ迫	鹿屋市吾平町上名		○				編布(5)・網目(1)	町(10)
127	中尾	鹿屋市吾平町上名			○	◎		編布(37)・網目(7) 編布(4)・平織(4)	セ(87) セ(99)
128	宮ノ前	垂水市新城		○	○			編布(2)	市(6)
129	宮下	垂水市新城			○	◎		編布(11)・平織(5)	市(5)
130	横道	垂水市高城			○			編布(2)	市(2)
131	俣刈	鹿屋市花岡						編布(1)	市(3)
132	柿窪	鹿屋市根本原		○		○		編布(2)	市(7)
133	本坊	鹿屋市南町						編布	県(13)
134	伊敷	鹿屋市南町							県(9)
135	鹿屋体大	鹿屋市白水						編布	県(23)
136	立神	鹿屋市高須町		◎		○		編布(3)	市(9)
137	榎木原	鹿屋市高須町		◎	○			編布(27)・網目(8)・平織(2) 編布(14)・網目(8) 編布(8)・網目(2)	県(44) 県(51) 県(53)
138	水の谷	鹿屋市上祇川	○	○	○	○		編布(1)・網目(2)・不明(1) 編布(25)・網目(10)	市(1) 市(5)
139	榎崎B	鹿屋市郷之原町		◎	○			編布(3)・網目(2)	セ(4)
140	岡泉	鹿屋市野里町				○		編布(3) 編布(1)・不明(1)	市(13) 市(27)
141	城元B	錦江町大根古城元						編布(2)	県(23)
142	鷲ヶ迫	錦江町大根古城元		○				編布(1)	町(5)
143	並迫	南大隅町根占山本		○				編布(1)	町(2)
144	上原	南大隅町根占山上原			◎			編布(5)・網目(1)	町(3)
145	出口	南大隅町根占横別府				◎		編布(10)	町(10)
銀毛地区									
146	大園	熊毛郡中種子町		○	○	○	○	編布(11)	セ(24)
宮崎県									
147	内丸	宮崎県えびの市西長江浦		○				編布(1)	市第32集
148	大浦	宮崎県都城市						編布(1)・網目(1)	鏡山論文
149	綾毛原第2	宮崎県都城市梅北町						編布(1)	市第6集
150	笹ヶ崎	宮崎県都城市梅北町						編布(1)	市第6集
151	梅北佐土原	宮崎県都城市梅北町			○			編布(1)	市第76集
152	黒土	宮崎県都城市大岩田町				◎	○	編布(20)・網目(1)・平織+ 網目(1)・平織(5)・木葉(6)	市第28集
153	牧の原第2	宮崎県都城市横市町		○				編布(2)・網目(5)	県埋七第19集
154	横市中原	宮崎県都城市横市町			◎	○		編布(18)・網目(2)・不明(2)	県埋七第85集
155	加治屋B	宮崎県都城市南横市町		○				編布(4)	市第81集
156	平田	宮崎県都城市南横市町				○		編布(3)	市第87集
157	星原	宮崎県都城市南横市町		○	◎	○		編布(18)・木葉(3)・不明(1)	市第72集
158	坂元A	宮崎県都城市南横市町				◎	○	編布(4)	市第71集
159	坂元B	宮崎県都城市南横市町				◎	○	編布(3)・網目(2)	市第71集
160	江内谷	宮崎県都城市養原町			○			編布(8)	市第59集
161	王子原	宮崎県都城市安久町			◎			編布(17)・網目(6)・編布+網目(1)	県埋七第45集
162	野添	宮崎県都城市安久町			○			編布(1)	県埋七第83集
163	尾平野洞窟	宮崎県都城市安久町						編布(1)	鏡山論文
164	中尾山・馬渡	宮崎県都城市葦原							市第5集
165	城ヶ尾	宮崎県高城町石山		○	○	○		編布(1)	町第1集
166	崩野	宮崎県南郷町榎原						網目	県史
167	曾和田	宮崎県北郷町北河内						編布(1)・網目(1)	町第12集
168	畑田	宮崎県田野町楠原			○			網目(1)	町第40集
169	白ヶ野第1	宮崎県清武町船引			◎			網目(12)	町第13集
170	滑川第2	宮崎県清武町船引			○			編布(1)	町第22集
171	松添 松添貝塚	宮崎県宮崎市青島西		◎	◎			網目(2) 網目(3)・不明(3)	鏡山論文 市第37集
172	右葛ヶ迫	宮崎県宮崎市折生迫			◎	○		編布(4)・網目(15)・編布+網目(2)	県埋七第21集
173	平畑	宮崎県宮崎市						網目	渡辺論文
174	上ノ原	宮崎県宮崎市佐土原町西上那珂			◎			編布(1)	県埋七第58集
175	藤山第1	宮崎県新富町新田			○			籠目(1)	県埋七第142集
176	春日	宮崎県新富町新田			○	◎		編布(3)	町第39集
177	南中原	宮崎県高鍋町上江		○				網目(1)	県第36集

表4 組織痕土器地名表(4)

番号	遺跡名	所在地	時期					種類(点数)	文献
			入佐新	黒川	無刻日突帯	刻日突帯	弥生前期		
178	上野原	宮崎県東郷町山陰			○			編布(4)	町第6集
179	内野々	宮崎県西郷村			○			編布(3)	県1992
180	組崎	宮崎県西郷村							県1992
181	山田	宮崎県延岡市小川町			○			編布(3)・網目(1)	原埋七第146集
182	今舞野	宮崎県延岡市						編布(1)	鏡山論文
183	南平第3	宮崎県高千穂町押方	○	○				不明(2)	原埋七第17集
184	中ノ原	宮崎県高千穂町押方	○	○				編布(4)	原埋七第17集

熊本県									
185	上山	熊本県人吉市						編布(1)	鏡山論文
186	アンモン山	熊本県人吉市下原田町			◎			不明(1) 編布(1)・網目(5)・平織(2)・ 籠目(5)	鏡山論文 市1985
187	深水谷川	熊本県相良村深水			◎	○		網代(13)	県第141集
188	大原天子	熊本県錦町木上	◎					不明(1)	県第138集
189	東小原	熊本県上村						編布(1)	鏡山論文
190	沖松	熊本県須恵村沖松				○		編布(3)	県第154集
191	長野	熊本県水俣市長野町	○	◎				不明(2)	県第189集
192	曲野	熊本県松橋町曲野	○			○		編布(2)	県第75集
193	青年山	熊本県松橋町						平織	渡辺1991
194	嫁坂	熊本県不知火町御領						編布(1)	鏡山論文
195	中郡	熊本県中央町						網目	鏡山論文
196	麻生原	熊本県甲佐町乙女						編布(1)	鏡山論文
197	沈日立山	熊本県城南町沈日	○				◎	網目(1)	県第26集
198	上の原	熊本県城南町塚原			○	○		編布(1)・網目(10)・平織(1)	県第58集
199	塚原	熊本県城南町						編布	県第16集
200	上岩屋堂	熊本県御船町						編布(1)・網目(1)	鏡山論文
201	下岩屋堂	熊本県御船町						編布(1)	鏡山論文
202	下山神	熊本県御船町御領原						網目(1)	鏡山論文
203	高野原	熊本県御船町上高野						網目(1)	鏡山論文
204	御船南原	熊本県御船町御船原						網目(1)	鏡山論文
205	久保	熊本県御船町豊秋	○					網目?(1)	県第18集
206	葉山	熊本県熊本市戸島町						網目(2)	鏡山論文
207	千原台	熊本県熊本市戸坂町						籠目	市1986
208	中原	熊本県熊本市小山町						網目(1)	鏡山論文
209	庵ノ前	熊本県熊本市清水町						編布(1)・網目(1)	鏡山論文
210	天拝山	熊本県熊本市清水町						網目(1)	鏡山論文
211	緑ヶ丘	熊本県熊本市龍田町						編布(1)	鏡山論文
212	小嶺原	熊本県熊本市大江町						編布(1)	鏡山論文
213	太郎迫	熊本県熊本市太郎迫町				○		不明(2)	県第186集
214	上南部	熊本県熊本市上南部町							渡辺1991
215	庵ノ前	熊本県熊本市龍田町	○			○		編布(1)	県第160集
216	岩倉山中腹	熊本県熊本市八景水谷	○	○				編布(3)	県第215集
217	神水	熊本県熊本市出水	○	○				編布(1)	市1986
218	扇田	熊本県熊本市貢町	○	○				編布(5)・網目(3)	市2004
219	上ノ原	熊本県熊本市健軍町						編布	市1971
220	健軍神社周辺遺跡群	熊本県熊本市健軍本町	○	◎				編布(8)・網目(9)	市2004
221	江津湖遺跡群	熊本県熊本市水原				◎		網目(1)	市2005
222	長鳥居	熊本県熊本市飽託						網目	鏡山論文
223	梅ノ木	熊本県菊陽町津久礼	○	○				網目(1)	県第119集
224	西原村	熊本県西原村						網目	鏡山論文
225	笹尾	熊本県植木町木留	○	○				編布(22)・網目(7)	町第13集
226	ラスギ	熊本県植木町滴水	○	○	○			編布(1)	町第18集
227	合志原	熊本県合志町						編布(1)	鏡山論文
228	瀬田裏	熊本県大津町瀬田裏	○	○	◎			編布(6)・網目(5)	町1991
229	三万田東原	熊本県七城町						編布(1)	鏡山論文
230	菊池郡	熊本県						編布(1)	鏡山論文
231	鞠智城跡	熊本県菊鹿町		○	◎			不明(2)	県第116集
232	蒲生・上の原	熊本県山鹿市蒲生上の原		○				網代(1)	県第158集
233	柳町	熊本県玉名市河崎				◎		編布(2)	県第200集
234	馬ノ水	熊本県				○		不明(2)	県第218集
								編布(2)・網目(1)	鏡山論文

福岡県									
235	柿原I	福岡県甘木市柿原		○	○	○		籠目?(1)	県1995
236	稗畑	福岡県朝倉町山田				○		網目?(1)	県1991
237	長田	福岡県朝倉町山田		○	○			網目?(1)	県1994
238	原の東	福岡県朝倉町菱野		○	○	○		編布(4)	県1999(53)
239	長島	福岡県朝倉町須川	○	○	○	○		編布(1)	県1999(55)
240	畑田	福岡県杷木町池田		○	○	○		網目(1)	県1999(56)
241	羽根戸	福岡県福岡市西区羽根戸						籠目(1)	市第134集

表5 組織痕土器地名表(5)

番号	遺跡名	所在地	時期					種類(点数)	文献
			人佐新	黒川	無刻日突端	刻日突端	弥生前期		
242	雀居	福岡県福岡市博多区雀居				◎	○	籠目? (2)	市第406集

佐賀県									
243	礫石	佐賀県大和町久池井						網目	鏡山論文
244	綿打	佐賀県多久市						網目	鏡山論文
245	吹野	佐賀県鹿島市三河内		◎	○			編布(7)・網目(20)	市第4集
246	上荒川峠	佐賀県七山村						網目	鏡山論文
247	女山	佐賀県唐津市枝去木						編布(12)・網目(10)	鏡山論文
248	笹ノ尾	佐賀県唐津市枝去木						布痕(2)・編布(27)・網目(28)	鏡山論文
249	菜畑	佐賀県唐津市		○	○	◎	◎	編布(1)・平織(6)・網目(5)・籠目(3)	市第5集
250	梅白	佐賀県唐津市梅白原				◎	○	編布(1)・網目(8)	県第154集
251	十遊II	佐賀県唐津市漆町			◎			編布(7)・網目(6)・不明(10)	市第54集
252	高峰	佐賀県唐津市唐ノ川		◎	○	○		編布(9)・網目(9)・網代(1)・不明(12)	市第58集
253	唐ノ川高峰	佐賀県唐津市唐ノ川		○	○	◎		編布(4)・網目(4)	市第72集
254	馬場野	佐賀県唐津市見借						編布・網目	鏡山論文
255	志佐八幡	佐賀県唐津市						編布・網目	鏡山論文
256	八幡西	佐賀県唐津市						編布・網目	鏡山論文
257	かんねお	佐賀県鎮西町岩野		○	○			編布(3)・網目(3)	県第62集
258	コッポ	佐賀県肥前町人野乙		○	○			編布(4)	県第62集

長崎県									
259	京ノ坪	長崎県瑞穂町高田		○	○	◎		編布(2)・網目(6)	町第2集
260	山ノ寺	長崎県南島原市深江町梶木						布痕(1)・編布(16)・網目(22)・籠目(9)・その他(5)	鏡山論文
261	百花台	長崎県国見町多比良						編布(3)・網目(7)	鏡山論文
262	百花台D	長崎県国見町多比良						網目(1)	県第92集
263	石原	長崎県国見町土黒宮田		○	○			編布(1)	町第3集
264	東鷹野	長崎県有明町東鷹野		○	○	○		編布(1)	町第13集
265	肥賀太郎	長崎県島原市北千本木町		○	◎	○		編布(1)・網目(3)・籠目(1) 編布(2)・網目(2)	県第97集 県第189集
266	礫石原	長崎県島原市						網目	鏡山論文・古田1977
267	稗田原	長崎県島原市稗田町		○	○	◎		不明(1) 編布(8)・網目(6)	県第136集 県第145集
268	中木場	長崎県							
269	権現脇	長崎県南島原市深江町上大野木場		○	○	◎	◎	編布(6)・網目(9)・平織(1)・不明(1) 編布(11)・網目(3)	町第2集 市第1集
270	上畦津	長崎県南島原市深江町上畦津			○	○		編布(1)・網目(1)	町第1集
271	山の寺梶木	長崎県深江町田中			○	○		網目? (1)	県第151集
272	中木場	長崎県深江町田中		○	○	○		編布(1)・網目(4)・籠目? (1)	県第115集
273	原山	長崎県北有馬町						編布(2)	鏡山論文
274	堂崎	長崎県有家町石田			○	○		編布(1)	県第58集
275	大屋敷	長崎県小浜町大屋敷			○	○		網目(1)	県第94集
276	朝日山	長崎県小浜町北本町							
277	小浜(黒谷)	長崎県小浜町小浜						編布(4)・網目(6)・その他(1)	鏡山論文
278	小野条里	長崎県諫早市小野町		○	○	○		網目? (1)	県第195集
279	峰ノ原	長崎県諫早市			○	○		網目(3)	県1975
280	風観岳支石墓群	長崎県諫早市破籠井町			○	◎		網目(7)	市第19集
281	風観岳支石墓群	長崎県大村市今村町			○			編布(1)・不明(1)	市第24集
282	黒丸	長崎県大村市黒丸町		○	○			編布(2)・網目(4)・籠目(1)	市1980
283	黒丸	長崎県大村市黒丸町		○	○	◎		編布(4)・網目(3)・籠目(4)・編布+網目(1)	県第132集
284	黒丸遺跡沖田地区	長崎県大村市黒丸町			○	○		網目(1)	市第28集
285	葛城	長崎県大村市鬼橋町		○	○			網目(7)	県第98集
286	磨屋町	長崎県長崎市諏訪町		○	○			編布(3)・網目(5)・籠目(1)	市2002
287	脇岬	長崎県野母崎町脇岬			○	○		網目(1)・籠目(1)	県第109集
288	宮田A	長崎県東彼杵町八反田			◎	○		網目(3)	県第93集
289	野中	長崎県東彼杵町瀬戸郷			○	○		籠目? (1)	県第93集
290	古田	長崎県小佐々町楠泊免		○	○			編布(1)	町第1集
291	松浦・今福	長崎県松浦市今福町			○	○		網目(5)	市第1集
292	水の窪	長崎県福江市						網目	市第1集
293	中島	長崎県福江市						編布	市第3集

の共伴が指標となる。ただし、単純遺跡や遺構内一括出土例は少なく、それぞれの遺跡で組織痕土器がどの時期に伴うか確定的ではないので、上記の期間で出土する土器類の全ての時期を示してある。感覚的ではあるが、主体的に出土する時期には「◎」を、少数のみの出土の場合は「○」で示してある。組織痕の種類と点数については、報告書で読みとれる範囲で記してあり、組織痕の種類がはっきりしないものに対しては、「?」・「不明」もしくは「その他」と記してある。組織痕土器が掲載された文献については、表中では略して記したが、最後にまとめて提示してある。文献が空欄になっているものについては、近くの遺跡が報告された際に文章中に記された遺跡である。

4 主な資料事例

組織痕土器は破片となって出土する例が多く、全形を確認できる資料は少ない。しかし、最近発掘件数や発掘調査面積が増大したことで、完形に復元できる事例も増えてきた。以下は器形や法量、あるいは部位ごとの器面調整などが明らかとなった主な組織痕土器例を示すこととする。

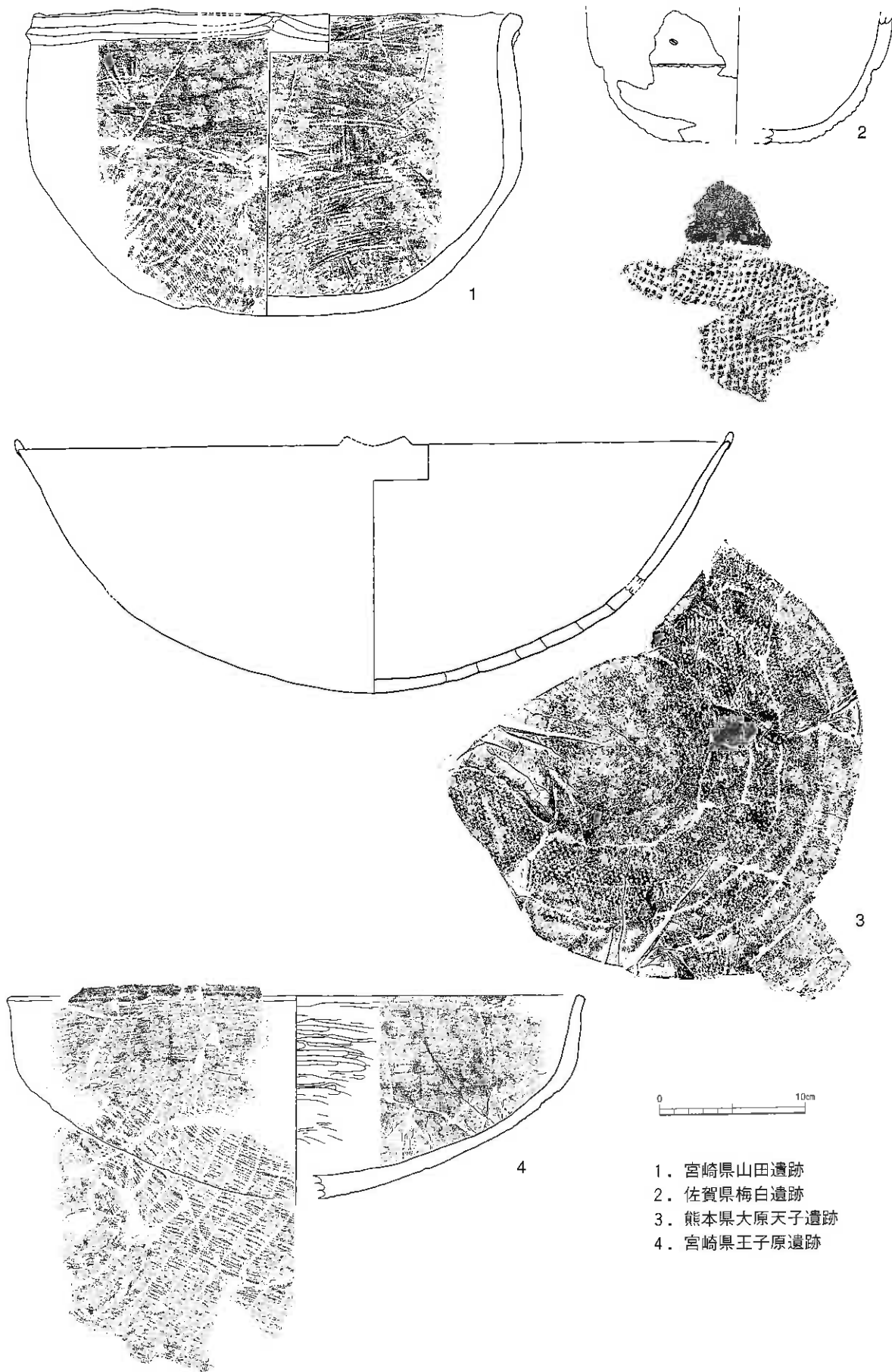
1の宮崎県山田遺跡例はほぼ完形のものであり、口縁部の直径は34cm、器高は21cmで深いつくりのものである。底部は半円球に近く、器高の半分近くまで編布の圧痕がみられ、そこから上位は直行し口縁端部のみをわずかに外反させる。口唇部から少し下がったところに、無刻目の突帯を巡らせている。共伴する遺物と土器そのものの特徴で、無刻目突帯文土器期に該当することが明白な資料である。

2の佐賀県唐津市に所在する梅白遺跡例は、他と違って小振りのものである。接地面がやや広く、丸みを帯びて直行する口縁部に至る。口径は、22cm前後と考えられる。組織痕は網目であり、型取りした部分は網目の厚さだけ器壁が薄くなっている。刻目突帯文土器期に該当する。

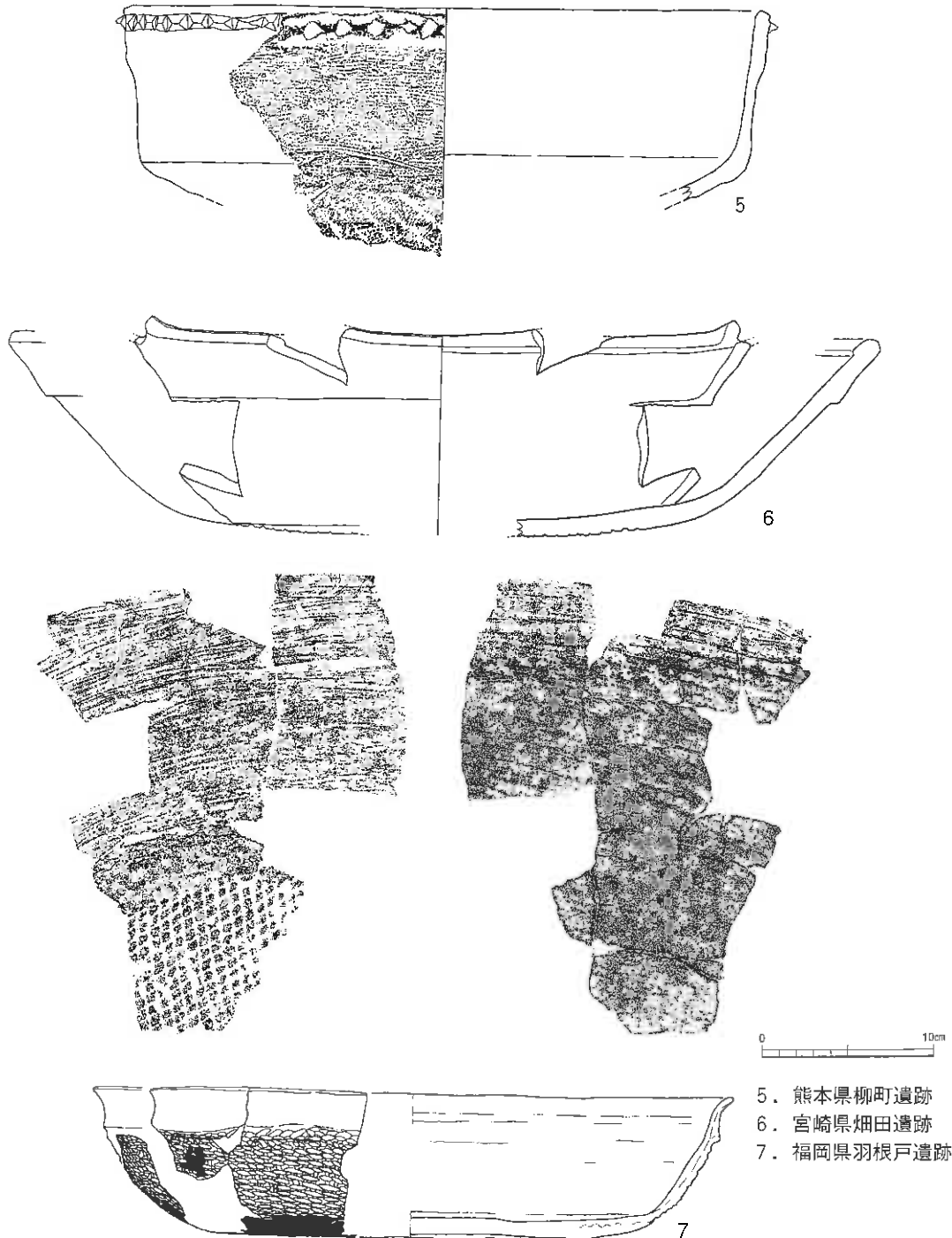
3の熊本県球磨郡錦町所在の大原天子遺跡出土例は、直径49.6cmで器高は17cmに復元されるものである。口縁部は直線的に外開きし、底部は緩く丸みを帯びる器形である。外面全面に接合痕がみられ、底部から粘土紐を巻き上げている状況がわかる好資料である。組織痕については実見していないことと、報告書にも明確に記されていないことから、はっきりしたことは言えないが、少なくとも編布ではないことは確かである。口縁部にリボン状突起が付けられていることから、外蓋を用いての使用には適さないことが窺える。黒川式土器期に該当する。

4の宮崎県王子原遺跡例は、直径40.4cmで器高は14cmに復元されるものである。底部は大きな曲面をもつ丸底であり、器高の半分辺りで緩く屈曲しながら直行する口縁部に至る。組織痕は編布によるものであり、緩い屈曲部まで底部全面にみられる。王子原遺跡では図示したものを含めて口径を復元できるものが12点出土しており、最小30cmから最大49cmの大きさがみられる。平均すると41.4cmの口径であり、これは他の遺跡でもおおよそ同様の値を示している。無刻目突帯文土器期に該当する。

5の熊本県柳町遺跡例は緩く湾曲する底部から、屈曲してほぼ垂直に直行する口縁部に至る。組織痕は編布であり、底面だけにみられる。口唇部からやや下がったところに刻目突帯文が巡らされ、刻目突帯文土器の時期まで組織痕をもつ中華鍋形土器が使われていることが分かる好資料である。口径は38.6cmを測る。



第1図 組織痕土器(1)



第2図 組織痕土器(2)

6の宮崎県畑田遺跡例は、直径52cmで器高は12cmに復元されるものである。わずかに曲面をもつ平底の底部から、少し屈曲して広く外開きする器形である。組織痕は網目であり、底部周縁はナデ消してある。口縁部は肥厚帯をもち、口唇部にはヒレ状の突起を付してある。土器そのものが口縁部肥厚帯をもつことから、無刻目突帯文土器期に該当する。

7の福岡市羽根戸遺跡例は、直径38.2cmで器高は8.6cmに復元されるものである。底部の接地面積が広く、口径の63%程度である。腰部で屈曲し体部は直線的に外開きし、口縁端部のみをわずか

に外反させる。組織痕は底部側面から体部の3分の2辺りまでみられ、そこから口縁部にかけては巻き上げ技法による成形である。なお、底面は組織痕をナデ消している。組織痕については渡辺誠氏によって復元されており（渡辺 1986）、モジリ編みによる籠目であり、縁に近づくにつれてタテ材を加えている様子や縁仕上げの状況がよく観察できる好資料である。刻目突帯文土器期に該当する。

5 検討課題

(1) 組織痕

土器を焼成した場合収縮するので元々の寸法をそのまま示すことはない点と、材質が何であったか確認できないという面はあるが、組織痕は当時の素材の状況を鮮やかに甦らすことのできる資料である。特に組織痕土器に使われる素材は細くて薄いものであり、良好な低湿地遺跡でも現物資料が出土することは滅多にないので、当時の素材を具体的に示すものとして貴重である。それぞれの素材研究が活発に進められるためにも、報告書に記載する際は渡辺誠氏が指摘する様なモデリングの写真はもとより、それぞれの組織痕についての計測値を提示することが重要である。なお、これらの組織痕は意識して付けられたのではなく偶然残ったものであり、当時の素材を全て示しているものではないことは留意しておかなければならない。

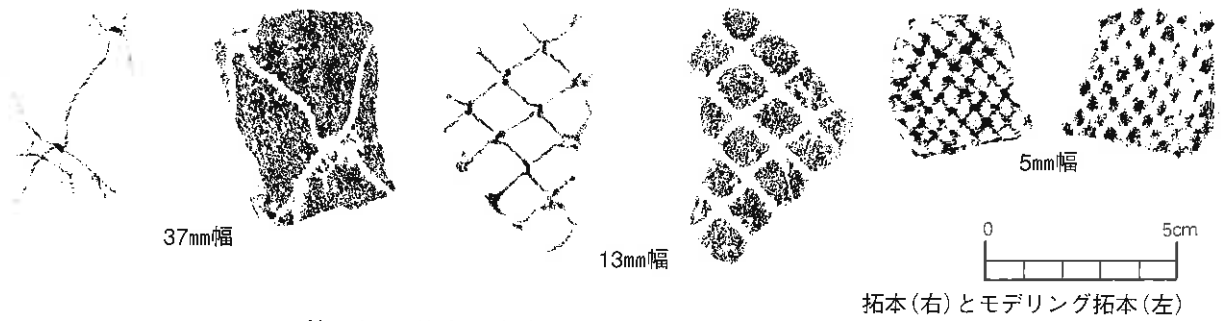
これまで確認されている組織痕土器には、編布・網目・平織・籠目・木葉があり、それぞれを併用したものもみられる。特に宮崎県内では網目と編布を併用したものがあり、地域的な特徴と言えよう。

ア 編布

編布は最も一般的にみられる組織痕であり、71%の遺跡で採用されている。特に鹿児島県では80%と高い率の遺跡で編布が採用されており、最も少ない福岡県では25%である。型取りの敷物として最も適していたことと、身近に多くあったことがその理由と考えられる。編み方にはタテ糸の間隔を変えることによって多くのバリエーションがみられ、デザインの多様性も窺える。基本的にタテ糸間隔は一定で、狭いものでは4mmから、広いものでは30mmを越えるものまでみられる。これに加え、一定の間隔でタテ糸の幅を二条もしくは三条分を狭くしたものがある。これらの復元には尾関清子氏が精力的に取り組んでおり、成果の公表が待たれる。地域や時期によってデザインに差異があるかがわかれば、当時の風俗の様子が浮かび上がってきてきて興味深い。編布圧痕のヨコ糸は良好に残っているが、タテ糸の撚り目は全く確認できないほど擦れている。これは永年衣服として使われた後、土器づくりに再利用された状況を窺わせる。編布は黒川式期から刻目突帯文期まで連続して確認できており、これらの時期の前にも後にも衣服として使われていたことが想定される。渡辺誠氏は、東北地方で縄文時代前期に編布の底部圧痕がみられることを指摘し、また一遍上人などの時宗僧侶が中世まで編布を着ていたことを明らかにし、近世や近代まで越後アンギンとして伝えられているとしている。

イ 網目

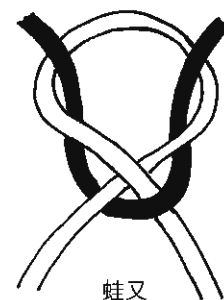
網目は編布に次いで多い組織痕であるが、出土しているのは全体の遺跡の39%である。佐



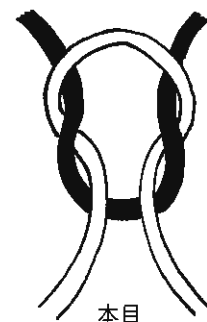
第3図 薩摩川内市計志加里遺跡出土の網目圧痕

賀県と長崎県で網目を採用する割合が高く、それぞれ県内遺跡の88%と74%を占めている。一方鹿児島県では網目を採用したのは26%であり、編布の使用率の高さが際立つ。網目の大きさにはバリエーションがあり、結び目間の長さが5mm～7mmのものと9mm～13mmのものが一般的である。9mm～13mmの網目の隙間では粘土に接する面積を確保できないため、重ね合わせて使用しているものもある。その際は網目の中心に結び目が来るようにすることによって隙間を埋めるような、細心の注意が払われたことが窺える。管見に触れた最も大きな網目は、鹿児島県薩摩川内市に所在する計志加里遺跡の37mmであり、最も小さな網目が鹿児島県曾於市に所在する西原段遺跡の2mmである。計志加里遺跡では9mm～13mmのものと5mm～7mmの2種類が多く、これに37mmの網目が加わる。組織痕土器がどこでつくられたのか明らかにしなければ語れないのであるが、遺跡周辺でつくられたことを前提にすると、計志加里遺跡は鹿児島県内で最も大きな川内川の潮が遡ってくる場所近くにあり、川と海の両方の魚が獲れる。9mm～13mmの網目は、川に生息する魚類のほとんどを掬うことが出来ただろうし、5mm～7mmのものは雑魚や昆虫類も掬っていたと考えられる。37mmの大きな網目は、海から遡る大型魚を狙ったものと推察される。一方、西原段遺跡は内陸部のシラス台地上にあり、近くには小河川しかない。小河川であっても鯉やウナギなどは遡上したことだろう。細かな目の網は魚だけでなく、水中に棲む生物も掬って食用としたり、他の魚類を獲るための餌などにしたと推察される。この様な小さな水棲生物を捕るには、細かく組んだり編まれたりした籠類も使われたことだろう。この様に、当時多種類の網が使われていた状況が窺え興味深い。網は鳥類を捕獲するなどのためにも使われたと考えられるが、一般的には漁網としての使用が最も頻繁だったことだろう。網目の大きさの違いは、目的とする魚の種類によって使い分けていたと考えられる。網目圧痕の出土は海岸部に限らず内陸部でも多くみられるので、九州全域で河川漁が盛んであったことが窺える。

網の形としては、タモ網や四ツ手網の他、石錘や土錘が多くの遺跡で知られていることから建網も使用していたことが考えられる。網に使われた糸の太さは、編布に使われたもの



蛙又



本目

第4図 網の編み方

より太く、網目が大きいほど太い糸を使用している。網の結び目には蛙又と本目と呼ばれる方法があり、蛙又の方が結節が強くてほぐりにくいという効果がある。網目圧痕をそれぞれ観察しなければならないが、結び目が緩んでいる例がほとんどないことから蛙又の方が多く採用されていると考えられる。網目の大きさは網を編む時に使う目板の幅によって決まるので、目的とする魚の大きさや漁法によって網の目の大きさや網の広さを決めて編んでいたと想定される。網に関しては、材質・形状・種類・漁法・どの時期から使われていたのかなど、今後の検討課題は多い。渡辺誠氏が述べるように、漁網自体の出土事例が極めて少ないことから、縄文時代の漁網研究にとって網目圧痕の果たす役割は非常に大きい（渡辺 1991）。

ウ 平織

平織は7%の遺跡で採用されている。タテ糸とヨコ糸が交互に上下となるもので、1本越え1本潜りの組み方と同様である。平織の存在が機織りによる織物の存在を示すとされるが、尾関清子氏によると編布編みの方法でも1cm辺りタテ糸21本・ヨコ糸17本までなら平織に編むのは可能であるという（尾関 1996）。すなわち、通常の編布が横木に接した位置でヨコ糸を置いて編むが、目の詰まった平織の場合、編む位置を横木から下方に離してタテ糸を中心に集めることによって可能となる。組織痕土器にみられる平織がどのような方法で編むあるいは織られたか判断できないが、少なくとも縄文時代晩期終末には存在していたことは明らかである。平織の出土は刻目突帯文土器に伴う例が多いものの、鹿児島県チシャノ木遺跡と大牟礼遺跡は無刻目突帯文期の単純層に伴うものである。黒川式期に平織に伴う例はなく、布の変遷は編布しかなかった段階から平織が加わる段階に推移したことが確認できる。1cm辺りの本数はタテ糸15～18本・ヨコ糸8～10本ずつが一般的であるが、鹿児島県フミカキ遺跡出土例は1cm辺りタテ糸14本・ヨコ糸14本の細かな目である。

エ 籠目

籠目は、平織と同様7%の遺跡で採用されている。型と粘土との間に挟む敷物ではなく、型そのものの編み物や組み物と考えられている。籠目には幾種類かあり、もじり編みのものは福岡市羽根戸遺跡がある。また、網代も鹿児島県上野原遺跡や下柵迫遺跡などで確認されている。鹿児島県馬塚松遺跡出土例は、幅2mmほどのタテ材によるもので外周になっても横方向の隙間が空くことがないことから、筆者は巻き編み（コイリング）ではないかと考えた（東 2006）。その際は2本のヨコ材をそのまま巻き上げているとしたが、民具事例にある様に2本目のヨコ材の繊維にタテ材を突き刺して巻き上げていると考えられる。佐賀県唐津市菜畑遺跡出土例について渡辺誠氏は1本越え1本潜りの網代組みと指摘しているが（渡辺 1982）、横方向の材が見えず外周になっても目が詰まっていることから、単に縦方向の材を増やしただけとは考えられない。この細かな目の籠類の復元については、今後の課題である。籠目は黒川式土器の単純遺跡でも出土し、無刻目突帯文土器期から刻目突帯文土器期にかけて継続して使われている。地域性については、明確な差を見出す程資料数が多くない。

オ 木葉

最近出土例が増えてきたものであり、葉脈がプリントされている。他の組織痕と違って編

んだり組んだりしているわけでないので、厳密には「組織痕」とは呼べないのかも知れない。しかし、土器製作における型取り法に敷物として用いる点は、他の組織痕と同じであるため同列に扱うこととする。木葉の形や種類、あるいは何枚ぐらいの葉が敷かれているのかと言った点について明らかにされたものはない。鹿児島県の仁田尾遺跡と上野原遺跡、宮崎県都城市の黒土遺跡と星原遺跡の南九州だけで出土しているが、植物の種類が南方系に近いものであるのか、それとも他の地域でも今後発見されるのか状況を見守りたい。時期的には特に限られたものではなく、他の組織痕とともに使われていたことが窺える。使えるものは何でも使っていた南九州の縄文人のおおらかさを感じる。

(2) 製作方法

組織痕土器の作り方は、早くから下部を型作りにし上部を巻き上げ技法で成形したと考えられてきた。第1図3の熊本県大原天子遺跡例は型作りの部分も巻き上げ技法と同じやり方をしていたことが分かる好資料であるが、全ての組織痕土器がこの様な方法をとっていたとは限らない。今後、レントゲン透視によるなど型作り部分の粘土貼付け方法を明らかにしていく必要がある。型取りをした部分と巻き上げにした部分との間に接合痕となる疑似口縁はみられないので、製作には時間を置かず一気に行われたと推察される。巻き上げ部分の外表面は粗いナデのままに残し、内表面は全面を磨くことによって平滑に仕上げている。この様な内外表面における器面調整の違いから、半粗半精製土器と呼ばれることもある（長野・下山 1986）。

組織痕がナデ消される事例も鏡山氏が研究した時点で既に知られていた。この様な事例は、鹿児島県チシャノ木遺跡をはじめとして資料数が増加している。したがって、組織痕は観察できないけれども、同じ様な器形で内表面が磨かれている土器については、同じ目的でつくられ使用されたと考えられる。器種としては組織痕をもつものともたないものは同一であり、組織痕がみられないものを組織痕土器と呼ぶわけにはいかないもので、両者をその形から中華鍋形土器とし組織痕のあるものだけを組織痕土器と呼んだ方が良いと考える。

(3) 使用時期

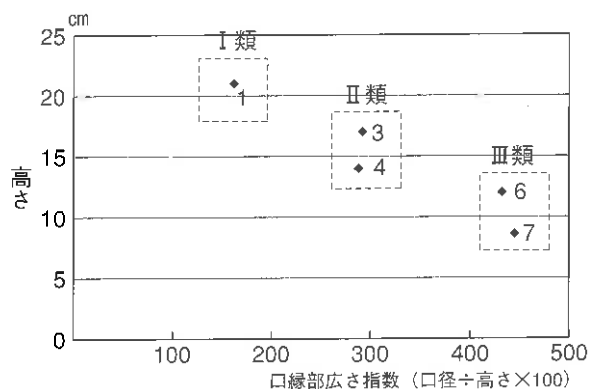
組織痕土器が認識された当初から、その使われた時期は縄文時代の終わりから弥生時代がはじまる頃とされてきた。出土資料が増えたことによって、そのことはさらに信頼性を増し、縄文時代から弥生時代への移り変わりを議論する上で欠かせない素材となっている。縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての遺跡は継続して営まれる集落が多く、組織痕土器がどの時期に確実に伴うか分かる例は限られている。今回の表では組織痕土器が主体的に出土する前後の土器型式についても表に取り上げてみたが、縄文時代晩期初頭の入佐式土器新段階の単純遺跡には全く見られない。次の黒川式土器が単独で大量に出土するのに伴う事例は熊本県大原天子遺跡ぐらいしかないけれども、少数の黒川式土器に伴う例は数遺跡みられる。このことから組織痕土器が使われたのは黒川式土器期からはじまり、無刻目突帯文土器期と弥生時代早期の刻目突帯文土器期に盛行したとすることが出来る。弥生時代前期の板付Ⅰ式土器期の単純遺跡に組織痕土器は確認されていないが、地域によっては使い続けられている可能性もあり今後の出土事例を見守りたい。同じ時期にしばしば組織痕土器と共伴して出土する遺物に孔列文土器があ

り、両者の関連性について示唆されることがある。千羨幸氏は組織痕土器と孔列文土器が南九州に中心をもつことから、両者を南部から北部へ波及したと考えている（千 2008）。しかし、今回把握した組織痕土器の出土時期からは、必ずしも南九州の方が古いと断言するまでに至っていない。組織痕をもたない中華鍋形土器がどの時期まで遡り、どの地域に古いものが存在するのか、あるいは組織痕土器に付着した炭化物による年代測定を行うことによって、どの地域に最も古いものがあるのか明らかにすることが課題である。

(4) 器形

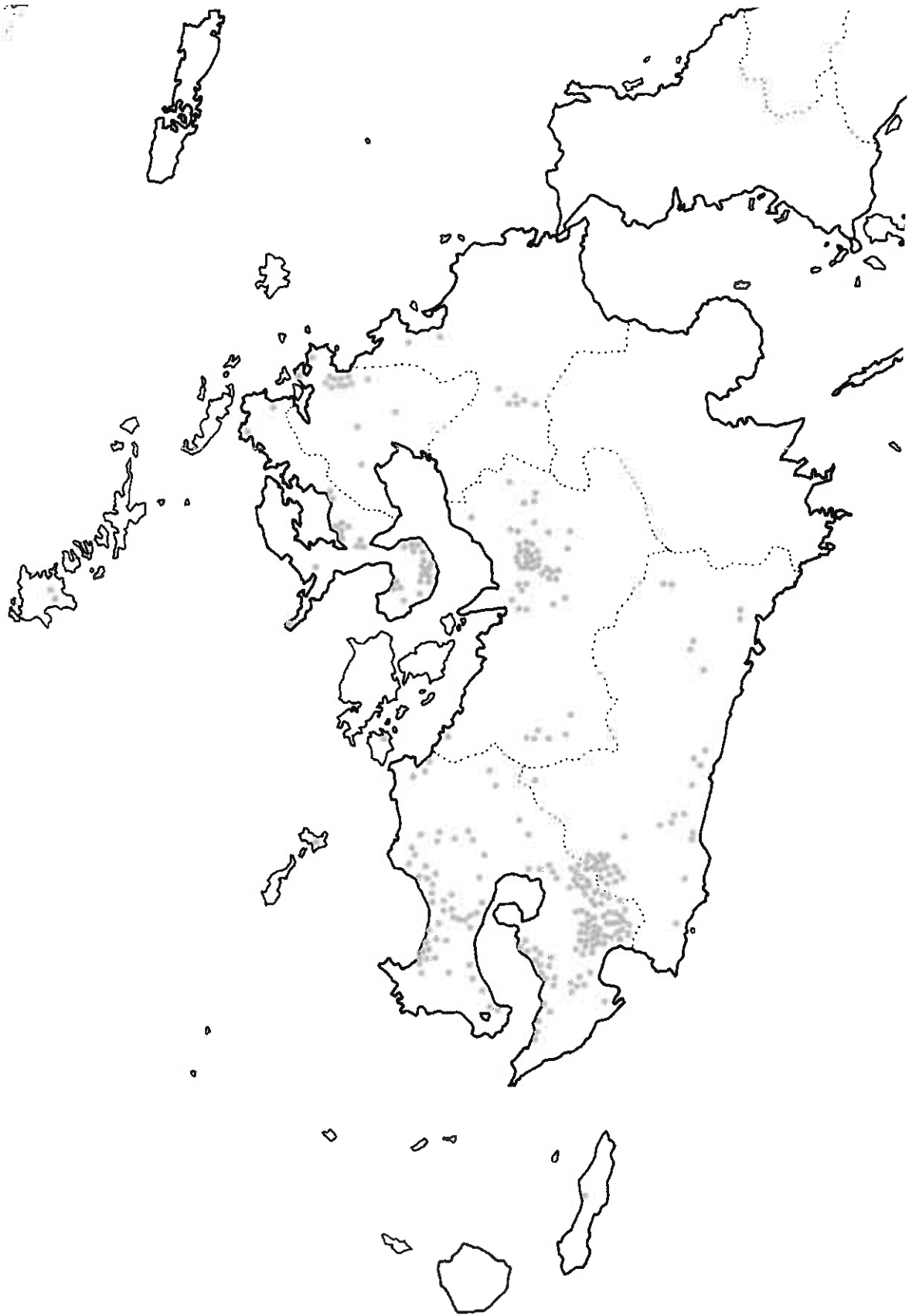
図示した1～7の組織痕土器を器形で分類すると、口径と高さの関係で3つに分けることができる。第5図で示したように、口径を高さで割って100倍した口縁部広さ指数をX軸に、高さをY軸にすると、違いが明確になる。口縁部広さ指数が200未満をI類、200以上400未満をII類、400以上をIII類とすると、1と2がI類、3～5がII類、6と7がIII類となる。I類は接地面の直径が口縁部のおよそ半分であり、II類は接地面がほとんどなく、III類は接地面が広い器形である。時期は3が黒川式土器期、

1・4・6が無刻目突帯文土器期、2・5・7が刻目突帯文土器期であり、黒川式土器期はII類しかなく、無刻目突帯文土器期と刻目突帯文土器期はそれぞれの類の器形がある。資料数は少ないものの、時期による器形変化については、古い方がII類で屈曲のない半円球形であり、新しくなると平底に近く屈曲して直行口縁となる器形が多くなる傾向がある。



第5図 口径と高さの関係

組織痕土器の器形は型取りをしているので、底部から体部にかけては元々あった籠類の形と同じであると考えられる。逆に言えば、組織痕土器の器形によって、現在まで残りにくい当時の植物繊維で作られた籠類の存在を類推できるのである。組織痕土器をつくるためにわざわざ籠を製作したとは考えられないので、ちょうど大きさや形の合った既存の籠類を使用したと考えられる。底部から体部にかけての器形は、半円球になるものと平底状の接地面が広いものがみられる。いずれも火を受ける部分の面積を広くとってある点に特徴がある。体部が屈曲する場合は型取りから巻き上げに変わる部分にあり、型で固定した以外の器形を体部上位で作っている。型取り部分と巻き上げ部分の器壁の厚さは変わらず、組織痕がくい込む分だけ薄くなる。特に網目圧痕は器壁に深くくい込んでおり、中には鹿児島県チシャノ木遺跡例のように器壁に穴が開いている例もあり、液体を扱うには不向きな作りである。また、口縁部が帯状に肥厚するものや突帯を巡らすものもあり、装飾的な効果と共に口縁部を割れにくくしている状況が窺える。口唇部に突起を施すものがあり、装飾的な効果をもっている点と、外蓋をかぶせるような使い方はしなかったと考えられる。器高に対して口径は長く、少なくとも1.5倍以上、中には4倍を超えるものもあり、浅くて広い器形が特徴である。口径の平均値は40cmを超え



第6図 組織痕土器の分布状況

ており、精製浅鉢形土器や深鉢形土器にはない口縁部の広さであり、機能的な面での理由が考えられる。

(5) 分布状況

第6図が組織痕土器の分布状況である。大分県と沖縄県では組織痕土器の出土例が無く、福岡県内でも福岡平野東部以東では確認されず、中国地方や四国地方での類例も聞かない。組織痕土器の出自が中・四国以東ではない点は確かであるが、組織痕をもたない中華鍋形土器がどのような地域まで存在するかが今後の課題である。組織痕土器の分布は、南は鹿児島県種子島に所在する大園遺跡であり、鹿児島県の甑島や長崎県の五島列島など島嶼部にも及んでいる。いずれにしても組織痕土器を含む中華鍋形土器の分布域は、北東部と南西諸島域を除く九州全域であり、この範囲に共通した生活様式がみられるのである。

最も濃密に分布するのが南九州であり、鹿児島県だけでも全体のほぼ半数の遺跡が分布する。縄文時代晩期中半から弥生時代早期にかけての南九州における環境が、生活するのに最も適していたからであると考ええる。この時期は水田稲作が始まろうとする直前であり、本格的な雑穀栽培が行われていた時期である。温暖多雨で火山灰の軟質な土壤に恵まれた南九州の広い土地は、植物の生育が早く、少し手を加えただけで良質な栽培地に変えることが出来る場所であり、当時の人々が生活するには条件がそろっていたと考えられる。その様な視点でみると、佐賀県菜畑遺跡と福岡県雀居遺跡は例外として、阿蘇山麓や島原半島など火山灰土壤地域に組織痕土器の分布は多くみられる。火山灰土壤は雑穀類を栽培するには適しており、組織痕土器を使う素地があったと考えられる。

(6) 使用目的

組織痕土器の外面が赤色化あるいは煤や炭化物が付着していることから、加熱用として使ったことは早くから言われていた。しかし、通常の加熱具であれば深鉢形土器や甕形土器で用が足せるわけであるが、それ以外に中華鍋形の組織痕土器が必要であったのは加熱の仕方にも特別の用途があったと考えられる。渡辺誠氏は組織痕に網目が多いことから魚汁や煮干しの調理を想定しているが、必ずしも海岸部や大きな河川沿いだけで使われたものでないのもっと他の使い方があっても良い。

筆者は組織痕土器の用途について、①深さが浅く、水分を多く使うものではない。②最大径が口縁部にあり蓋の使用には適さず、煮込むことより炒る様な使い方が適している。③口径が広いので、かき混ぜる際に火傷の危険性が少ない。④内面が磨かれているので、食材が滑りやすい。⑤器形が半球形に近いものから広い平底まであり、食材をかき混ぜやすい。⑥火を受ける部分が広く、熱効率が良い。⑦時期が縄文時代晩期中半から弥生時代初頭であり、稲を含めた雑穀類の栽培が本格化した頃と重なる。⑧民俗例に焼き米と呼ばれる一度平鍋で殻が着いたまま炒ってから調理する事例があることや(川野 1998)、粟や栗や椎の実などを大鍋で炒って食べる事例がある。これらのことなどから、組織痕土器も穀類や木の実類を炒るのに使われたのではないかと想定した。炒ることの効果は、未熟な果実を乾燥させて固める点や旨味を引き出す点、それに実と薄皮の間に乾燥による隙間ができることによって、殻を外し易くする点が

考えられる。

用途についての今後の課題は、組織痕土器に付着した炭化物の分析を進めると共に、同様の器形の加熱具でどのような行為が成されているのか、各時代の出土遺物を検討したり国内外を含めた民俗事例を引き出す必要がある。中華鍋形をした各時代の加熱具は、古代から中世にかけての土鍋・近世の焙烙・近現代の鋳鍋や平鍋などがある。また、民俗学研究者である川野和昭氏が実施している、水田稲作と焼き畑が共存するラオスでの調査に注目していきたい。また、組織痕をもつものを含めた中華鍋形土器が九州で生まれ発達したものであるのか、あるいは外から伝わったものであるか明らかにすることが、使用方法を解明する糸口をつかむことにもなるだろう。

6 まとめ

組織痕土器は中華鍋形土器の内、製作の際型から取り外し易いように敷いた組織や型そのものの痕が残ったものである。組織痕には編布・網目・平織・薄手の籠目があり、編布が最も多く使われており、新しい時期に平織が加わる。それぞれの組織を復元することによって、当時の布や網の規格やデザインなどを再現することが今後重要になってくると考える。型そのものが圧痕として残る籠目は、幾種類かの編み方や組み方があり、その復元が待たれる。最近では木葉を使った事例もみられるようになり、身近にあって薄くて面積の広い素材が型離れし易くするために使われた状況が窺える。今回、九州における組織痕土器の地名表を作成したところ、293遺跡を挙げることができ今後もその数は増しつつある。縄文時代晩期前半の入佐式土器新段階に組織痕土器が確実に伴う例はなく、次の黒川式土器の段階に出現し、無刻目突帯文土器の時期に盛行する状況が窺える。また、弥生時代に入り刻目突帯文土器の時期まで残っていることは確かであり、弥生時代前期の板付I式土器の段階で組織痕土器を含めた中華鍋形土器は全くみられなくなる。分布状況は鹿児島県での出土例が最も多く、大分県では確認されていないものの中華鍋形土器そのものが器種の一つとして、この時期に加わっているのかどうか見極める必要がある。また、韓国釜山市の東三洞貝塚で出土している網目圧痕をもつ土器が（渡辺 1991）、組織痕土器そのものであるのかどうか検証することによって、分布状況や出自の問題に大きく影響してくる。組織痕土器にとって最も重要な課題が、縄文時代を通して土器製作技法になかった型取り技法を採用してまで中華鍋形の土器がなぜ必要だったのか、あるいは弥生時代前期になって使われなくなるのはなぜなのか追究することである。栽培が本格化しはじめた当初の穀類を炒ることによって、中身を乾燥させたり殻を外しやすくするという仮説を提示したが、状況証拠のみに留まっている。今後、多くの議論を通してその真実に迫っていかなければならない。

7 おわりに

今回あげた地名表は、研究史で示した文献の外に鹿児島県歴史資料センター黎明館と鹿児島県立埋蔵文化財センターが所蔵している九州各県の発掘調査報告書を参考にしたものである。もとより刊行された全部の報告書が揃っているわけではなく、見落としも少なからずあると考える。それで

も鹿児島県に限って言えば、1998年には86遺跡だったのが10年で60遺跡も増加しており、さらに未報告分を含めると今後もその数は増え続けるだろう。願わくば各県の見落としした事例があればご指摘いただき、さらに充実した地名表にして多くの方々が組織痕土器の研究に取り組めるようにしていきたいと考える。鏡山猛先生の研究から十二支で言えば今年は4巡目の年であり、次の還暦までには組織痕土器の故地や始終の謎が解明されれば、縄文時代から弥生時代への変遷の様相がさらに明らかになることだろう。

文献

- 大脇直泰 1961 「押圧文土器について」『古代学』第9巻第3号 古代学協会
尾関清子 1996 『縄文の衣』 学生社
鏡山 猛 1961a 「原生期の織布—九州の組織痕土器を中心に—(上)」『史淵』第84輯 九州史学会
鏡山 猛 1961b 「原生期の織布—九州の組織痕土器を中心に—(中)」『史淵』第86輯 九州大学文学部
鏡山 猛 1962 「原生期の織布—九州の組織痕土器を中心に—(下)」『史淵』第89輯 九州大学文学部
川野和昭 1998 「ラオスの少数民族の暮らしと文化—南九州との比較から—」『黎明館企画特別展 海上の道』鹿児島県歴史資料センター黎明館
千 羨幸 2008 「西日本の孔列土器」『日本考古学』第25号 日本考古学協会
長野真一・下山覚 1986 『水の谷遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 鹿屋市教育委員会
東 和幸 1998 「鹿児島県の組織痕土器」『南九州縄文通信』No12 南九州縄文研究会
東 和幸 2006 「南九州縄文時代の編み物」『鹿児島民具』第18号 鹿児島民具学会
渡辺 誠 1982 「組織痕について」『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告第5集 唐津市教育委員会
渡辺 誠 1986 「羽根戸遺跡の組織痕土器について」『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 福岡市教育委員会
渡辺 誠 1991 「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』肥後考古第8号 肥後考古学会

組織痕土器掲載文献・報告書

- 河口貞徳 1967 「鹿児島県片野洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
大隅町役場 1969 『大隅町誌』
池水寛治・戸崎勝洋 1974 「内ノ浦戸木遺跡」『鹿児島県考古』第9号 鹿児島県考古学会
松下文春 1974 「末吉町柳井谷遺跡の蓆目圧痕土器について」『鹿児島県考古』第10号 鹿児島県考古学会
鹿児島県考古学会 1988 『鹿児島県下の縄文時代晩期遺跡』
鹿児島県教育委員会 1977 『指辺遺跡・横峯遺跡・中ノ峯遺跡・上焼田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
鹿児島県教育委員会 1978 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
鹿児島県教育委員会 1980 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
鹿児島県教育委員会 1982 『小山遺跡・谷ノ口遺跡・宮後遺跡・上城城址』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
鹿児島県教育委員会 1982 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
鹿児島県教育委員会 1983 『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
鹿児島県教育委員会 1983 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報—昭和58年度—』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(29)
鹿児島県教育委員会 1985 『鹿児島県市町村遺跡地名表』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(36)
鹿児島県教育委員会 1986 『国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書—昭和60年度—』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(37)
鹿児島県教育委員会 1987 『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)
鹿児島県教育委員会 1989 『榎木原遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(51)
鹿児島県教育委員会 1990 『榎木原遺跡Ⅲ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(53)
鹿児島県教育委員会 1992 『新番所後Ⅱ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(62)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 『榎崎B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 『竹牟礼遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(5)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(6)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1995 『平松城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(13)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1999 『柿内遺跡・大園遺跡・西俣遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(24)

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001 『栢堀遺跡・西ノ原B遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(30)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 『九日田遺跡・前原和田遺跡・供養之元遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (36)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 『計志加里遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (38)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『上野原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (52)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『武A・B・C遺跡・鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (58)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『城ヶ尾遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (60)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『上ノ原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (62)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004 『上ノ平遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (70)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004 『九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (71)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004 『フミカキ遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (74)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 『大坪遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (79)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 『京田遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (81)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 『中尾遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (87)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 『南田代遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (88)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006 『農業開発総合センター遺跡群Ⅱ』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (97)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006 『農業開発総合センター遺跡群Ⅲ』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (98)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006 『中尾遺跡・四方高迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (99)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006 『伏野遺跡・隠迫遺跡・栢堀遺跡・仁田尾遺跡・御仮屋跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (101)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006 『市ノ原遺跡 第5地点』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (105)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 『前原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (107)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 『堂園遺跡A地点・古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡・山神迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (108)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 『山ノ田遺跡・松ヶ尾遺跡・萩野B遺跡・谷ヶ迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (109)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 『魚見ヶ原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (111)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 『上水流遺跡1』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (113)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『西原遺跡・牧ノ原B遺跡・原村Ⅰ遺跡・原村Ⅱ遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (124)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『関山遺跡・鳥居川遺跡・チャシノ木遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (125)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (127)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『仁田尾遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (128)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『市ノ原遺跡 第4地点・第2地点』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (130)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『霜月田遺跡・都原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (131)
- 鹿児島市教育委員会 1999 『不動寺遺跡』 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 (25)
- 鹿児島市教育委員会 2001 『大龍遺跡B地点』 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 (34)
- 鹿児島市教育委員会 2002 『原田久保遺跡』 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 (35)
- 喜入町教育委員会 1988 『下大原遺跡・松木田遺跡』 喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 喜入町教育委員会 1999 『帖地遺跡』 喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 指宿市教育委員会 1980 『鳥山調査区(西原道畑遺跡・西原迫遺跡・早馬迫遺跡)』 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 知覧町教育委員会 1983 『永野遺跡』 知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 加世田市教育委員会 1995 『干河原遺跡』 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)
- 金峰町教育委員会 1991 『木落遺跡・高源寺遺跡』 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

- 金峰町教育委員会 2005 『下堀遺跡』 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 (20)
- 吹上町教育委員会 2005 『地頭用遺跡・高柳A・B遺跡・五反田A・B遺跡・大園A遺跡』 吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 日吉町教育委員会 1993 『瀬戸口遺跡』 日吉町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 東市来町教育委員会 1988 『上二月田遺跡』 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 東市来町教育委員会 1995 『前畑遺跡・伊作田城跡』 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)
- 東市来町教育委員会 1996 『老ノ原遺跡』 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
- 薩摩町教育委員会 1990 『中原遺跡・石下橋遺跡・日露遺跡』 薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 薩摩町教育委員会 2005 『北方遺跡』 薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 宮之城町教育委員会 2001 『一ツ木遺跡』 宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書 (9)
- 東郷町教育委員会 1986 『五社遺跡』 東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 東郷町教育委員会 2002 『坂ノ下遺跡』 東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)
- 里村教育委員会 1985 『中町馬場遺跡』 里村埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 里村教育委員会 2004 『中町馬場遺跡Ⅱ』 里村埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)
- 出水市教育委員会 1995 『市来遺跡・老神遺跡』 出水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 高尾野町教育委員会 2005 『下柵迫遺跡』 高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 高尾野町教育委員会 2005 『下柵迫Ⅱ遺跡・道下段遺跡』 高尾野町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 東町教育委員会 1998 『二浦遺跡』
- 国分市教育委員会 1985 『妻山元遺跡』 国分市埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 牧園町教育委員会 1992 『中福良遺跡』 牧園町埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
- 福山町教育委員会 2003 『供養の元遺跡』 福山町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 福山町教育委員会 2005 『前原和田遺跡』 福山町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)
- 財部町教育委員会 1994 『宮原遺跡・霧島迫A・B遺跡』 財部町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 財部町教育委員会 1998 『西栗須遺跡』 財部町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 末吉町教育委員会 1986 『上中段遺跡 他4遺跡』 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 末吉町教育委員会 1987 『四枝道遺跡・楠木岡遺跡・中牛牧遺跡』 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 末吉町教育委員会 1989 『井手ノ上遺跡』 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
- 大隅町教育委員会 1994 『西原段Ⅱ遺跡』 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
- 大隅町教育委員会 1997 『西原段Ⅱ遺跡』 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)
- 大隅町教育委員会 1999 『向井ヶ迫遺跡』 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書 (18)
- 大隅町教育委員会 2002 『久保崎Ⅳ遺跡その2』 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書 (25)
- 大隅町教育委員会 2004 『久保崎Ⅲ遺跡』 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書 (36)
- 大隅町教育委員会 2005 『中迫Ⅱ遺跡・前畑遺跡Ⅱ・久保崎Ⅲ遺跡Ⅱ・元屋敷遺跡』 大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書 (39)
- 志布志町教育委員会 1979 『別府(石踊)遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 志布志町教育委員会 1986 『山久保A遺跡・山久保B遺跡・蔵園遺跡・中迫遺跡・西中畑遺跡・小迫遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (11)
- 志布志町教育委員会 1987 『出口B遺跡・潤ヶ野遺跡・東原遺跡・樽野遺跡・上原遺跡・平原A遺跡・平原B遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)
- 志布志町教育委員会 1988 『飛渡遺跡・島廻遺跡・白木原遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (13)
- 志布志町教育委員会 1990 『鎌石遺跡・田吹野遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (16)
- 志布志町教育委員会 1990 『道重遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (17)
- 志布志町教育委員会 1996 『倉園C遺跡』 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (26)
- 有明町教育委員会 1985 『札元遺跡・山原遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)
- 有明町教育委員会 2003 『黒葛遺跡(第1次・第2次)・牧原遺跡・牧原A遺跡・大迫遺跡・飯野A遺跡・本村遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
- 有明町教育委員会 2005 『有明町内遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書 (11)
- 大崎町教育委員会 2001 『立山B遺跡』 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
- 垂水市教育委員会 1997 『横道遺跡』 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)
- 垂水市教育委員会 2001 『宮下遺跡・小房迫前遺跡』 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 垂水市教育委員会 2002 『宮ノ前遺跡・重田遺跡』 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)
- 鹿屋市教育委員会 1984 『上祇川遺跡群(上楠原遺跡・水ノ谷遺跡・丸岡遺跡)』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 鹿屋市教育委員会 1985 『俣刈遺跡・鶴羽遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
- 鹿屋市教育委員会 1986 『水の谷遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 鹿屋市教育委員会 1987 『柿窪遺跡・大久保遺跡・城ヶ崎遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)

鹿屋市教育委員会 1988 『立神遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
 鹿屋市教育委員会 1988 『岡泉(Ⅱ)遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
 鹿屋市教育委員会 1989 『岡泉遺跡Ⅵ』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(27)
 吾平町教育委員会 1985 『大牟礼遺跡ほか3遺跡』 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
 吾平町教育委員会 1988 『前木場原遺跡』 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
 吾平町教育委員会 1992 『筒ヶ迫遺跡・荷掛原遺跡』 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
 大根占町教育委員会 1992 『鳥ノ巣遺跡(他6遺跡)』 大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
 根占町教育委員会 1989 『並迫遺跡・茂谷遺跡・東馬渡遺跡・馬渡遺跡』 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
 根占町教育委員会 1990 『上原遺跡』 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
 根占町教育委員会 2000 『谷添遺跡・出口遺跡』 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1998 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』 12

宮崎県教育委員会 1992 『内野々遺跡』
 宮崎県教育委員会 1993 『宮崎県文化財調査報告書』 第36集
 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 『神殿遺跡B・C地区』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集
 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 『牧の原第2遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2000 『右葛ヶ迫遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2001 『王子原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『上ノ原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第58集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『豊満大谷遺跡・野添遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『宇都第3遺跡・横市中原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『藤山第1遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第142集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 『山田遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集
 えびの市教育委員会 2002 『長江浦地区遺跡群』 えびの市埋蔵文化財調査報告書第32集
 都城市教育委員会 1986 『都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内中央部)』 都城市文化財調査報告書第5集
 都城市教育委員会 1987 『都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内南部)』 都城市文化財調査報告書第6集
 都城市教育委員会 1994 『黒土遺跡』 都城市文化財調査報告書第28集
 都城市教育委員会 2003 『江内谷遺跡』 都城市文化財調査報告書第59集
 都城市教育委員会 2006 『坂元A遺跡・坂元B遺跡』 都城市文化財調査報告書第71集
 都城市教育委員会 2006 『横市地区遺跡群 星原遺跡』 都城市文化財調査報告書第72集
 都城市教育委員会 2007 『梅北佐土原』 都城市文化財調査報告書第76集
 都城市教育委員会 2007 『加治屋B遺跡(縄文時代・弥生時代編)』 都城市文化財調査報告書第81集
 都城市教育委員会 2008 『平田遺跡A地点・B地点・C地点』 都城市文化財調査報告書第87集
 高城町教育委員会 1989 『城ヶ尾遺跡』 高城町文化財調査報告書第1集
 田野町教育委員会 2001 『畑田遺跡』 田野町文化財調査報告書第40集
 清武町教育委員会 2004 『白ヶ野第1・第4遺跡』 清武町埋蔵文化財調査報告書第13集
 清武町教育委員会 2007 『滑川第2遺跡』 清武町埋蔵文化財調査報告書第22集
 宮崎市教育委員会 1999 『松添貝塚Ⅱ』 宮崎市文化財調査報告書第37集
 新富町教育委員会 2004 『祇園原遺跡・春日遺跡』 新富町文化財調査報告書第39集
 北郷町教育委員会 2003 『曾和田遺跡』 北郷町文化財調査報告書第12集
 東郷町教育委員会 2003 『上野原遺跡』 東郷町文化財調査報告書第6集
 宮崎県 1989 『宮崎県史 資料編 考古Ⅰ』

熊本県教育委員会 1975 『塚原』 熊本県文化財調査報告第16集
 熊本県教育委員会 1975 『久保遺跡』 熊本県文化財調査報告第18集
 熊本県教育委員会 1977 『沈目立山遺跡』 熊本県文化財調査報告第26集
 熊本県教育委員会 1983 『上の原遺跡Ⅰ』 熊本県文化財調査報告第58集
 熊本県教育委員会 1985 『曲野遺跡Ⅲ』 熊本県文化財調査報告第75集
 熊本県教育委員会 1991 『鞠智城跡』 熊本県文化財調査報告第116集
 熊本県教育委員会 1993 『大原天子遺跡』 熊本県文化財調査報告第138集
 熊本県教育委員会 1994 『深水谷川遺跡』 熊本県文化財調査報告第141集
 熊本県教育委員会 1996 『沖松遺跡』 熊本県文化財調査報告第154集
 熊本県教育委員会 1996 『蒲生・上の原遺跡』 熊本県文化財調査報告第158集
 熊本県教育委員会 1997 『庵ノ前遺跡Ⅲ』 熊本県文化財調査報告第160集
 熊本県教育委員会 1999 『太郎迫遺跡・妙見遺跡』 熊本県文化財調査報告第186集

- 熊本県教育委員会 2000 『長野遺跡』 熊本県文化財調査報告第189集
 熊本県教育委員会 2001 『梅ノ木遺跡Ⅱ』 熊本県文化財調査報告第199集
 熊本県教育委員会 2001 『柳町遺跡Ⅰ』 熊本県文化財調査報告第200集
 熊本県教育委員会 2003 『岩倉山中腹遺跡』 熊本県文化財調査報告第215集
 熊本県教育委員会 2004 『柳町遺跡Ⅱ』 熊本県文化財調査報告第218集
 人吉市教育委員会 1985 『アンモン山遺跡』
 大津町教育委員会 1991 『瀬田裏遺跡調査報告Ⅰ』 大津町文化財調査報告
 熊本市教育委員会 1971 『熊本市健軍町上ノ原遺跡発掘調査報告書』
 熊本市教育委員会 1986 『神水遺跡発掘調査報告書』
 熊本市教育委員会 1986 『戸坂遺跡発掘調査報告書』
 熊本市教育委員会 2004 『扇田遺跡』
 熊本市教育委員会 2004 『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 平成15年度』
 熊本市教育委員会 2005 『江津湖遺跡群Ⅰ』
 植木町教育委員会 2002 『笹尾遺跡Ⅱ』 植木町文化財調査報告第13集
 植木町教育委員会 2004 『塔ノ本遺跡ほか』 植木町文化財調査報告第18集
- 福岡県教育委員会 1991 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告20』
 福岡県教育委員会 1994 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告30』
 福岡県教育委員会 1995 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告37』
 福岡県教育委員会 1999 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告53』
 福岡県教育委員会 1999 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告55』
 福岡県教育委員会 1999 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告56』
 福岡市教育委員会 1986 『羽根戸遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集
 福岡市教育委員会 1995 『雀居遺跡2』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集
- 佐賀県教育委員会 1981 『上場の文化財（Ⅰ）』 佐賀県文化財調査報告書第62集
 佐賀県教育委員会 2003 『梅白遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第154集
 鹿島市教育委員会 1989 『吹野遺跡』 鹿島市文化財調査報告第4集
 唐津市教育委員会 1982 『菜畑遺跡』 唐津市文化財調査報告第5集
 唐津市教育委員会 1993 『十蓮Ⅱ遺跡』 唐津市文化財調査報告書第54集
 唐津市教育委員会 1994 『高峰遺跡（2）』 唐津市文化財調査報告第58集
 唐津市教育委員会 1996 『唐ノ川高峰遺跡（3）』 唐津市文化財調査報告書第72集
- 長崎県教育委員会 1975 『諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』
 長崎県教育委員会 1982 『堂崎遺跡』 長崎県文化財調査報告書第58集
 長崎県教育委員会 1988 『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 長崎県文化財調査報告書第92集
 長崎県教育委員会 1989 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ』 長崎県文化財調査報告書第93集
 長崎県教育委員会 1989 『長崎県埋蔵文化財調査報告集報ⅩⅡ』 長崎県文化財調査報告書第94集
 長崎県教育委員会 1990 『長崎県埋蔵文化財調査報告集報Ⅷ』 長崎県文化財調査報告書第97集
 長崎県教育委員会 1990 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ』 長崎県文化財調査報告書第98集
 長崎県教育委員会 1993 『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』 長崎県文化財調査報告書第109集
 長崎県教育委員会 1994 『中木場遺跡』 長崎県文化財調査報告書第115集
 長崎県教育委員会 1997 『黒丸遺跡Ⅱ』 長崎県文化財調査報告書第132集
 長崎県教育委員会 1997 『稗田原遺跡Ⅰ』 長崎県文化財調査報告書第136集
 長崎県教育委員会 1998 『稗田原遺跡Ⅱ』 長崎県文化財調査報告書第145集
 長崎県教育委員会 1999 『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ』 長崎県文化財調査報告書第151集
 長崎県教育委員会 2006 『肥賀太郎遺跡』 長崎県文化財調査報告書第189集
 長崎県教育委員会 2008 『小野糸里遺跡』 長崎県文化財調査報告書第195集
 大村市黒丸遺跡調査会 1980 『黒丸遺跡』
 諫早市教育委員会 2006 『風観岳支石墓群発掘調査報告書』 諫早市文化財調査報告書第19集
 大村市教育委員会 2000 『黒丸遺跡ほか発掘調査概報Vol. 2』 大村市文化財調査報告書第24集
 大村市教育委員会 2005 『黒丸遺跡ほか発掘調査概報Vol. 5』 大村市文化財調査報告書第28集

- 松浦市教育委員会 1998 『松浦・今福遺跡』 松浦市文化財調査報告書第14集
深江町教育委員会 2005 『下末宝遺跡・上畦津遺跡』 深江町文化財調査報告書第1集
深江町教育委員会 2006 『権現脇遺跡』 深江町文化財調査報告書第2集
南島原市教育委員会 2007 『権現脇遺跡』 南島原市文化財調査報告書第1集
小佐々町教育委員会 1985 『古田遺跡』 小佐々町文化財調査報告書第1集
有明町教育委員会 2001 『東鷹野遺跡』 有明町文化財調査報告書第13集
瑞穂町文化財保護協会 1994 『京ノ坪遺跡』 瑞穂町文化財保護協会調査報告書第2集
国見町教育委員会 2003 『石原遺跡・矢房遺跡』 国見町文化財調査報告書第3集
長崎市教育委員会 2002 『磨屋町遺跡』
福江市教育委員会 1976 『水の窪遺跡』 福江市文化財調査報告書第1集
福江市教育委員会 1987 『中島遺跡』 福江市文化財調査報告書第3集
古田正隆 1977 『礫石原遺跡』 百人委員会埋蔵文化財報告7